りゅうおうのおしごと！　八一と銀子の盤外戦

ぴよ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二人がイチャつくだけのお話

７巻発売前に書いたものですので、７巻以降の内容は反映されていません

ですので６巻からのｉｆ的な感じで読んでもらえたらと思いますｍ（＿＿）ｍ

目次

竜王と女王 1
銀桂研究会 27
勝負手 34
感想戦 62

竜王と女王

「負けました」

様々な感情を押し殺したような、重々しい声が静かな対局室に響き渡った。

それを聞いて、俺の意識は思考の海から現実へと戻ってきて、目の前で頭を下げている対局相手の姿が見えてくる。

慌てて俺も頭を下げる。

「あ……ありがとうございました」

あの名人との竜王戦以降、対局中に極度に集中すると時間の感覚が捻じ曲がり、盤上のこと以外は何も見えなくなることが多々ある。

今日は持ち時間の長い順位戦で、気付けばもうすっかり夜も更けていた。

でも、俺がハッキリと覚えているのは昼食休憩くらいまでで、夕食に何を食べたかすら中々思い出せない。たぶん、何かは食べたんだとは思う。空腹感はないし。対局室に持ってきた水もいつの間にかほとんど空になってるし。

まぁ、何はともあれ勝てて良かった。
どの棋戦も大事だが、棋士にとって順位戦は特に重要な意味を持つのだ。
俺――九頭竜八一は、去年１６歳で史上最年少でのタイトル、竜王獲得を果たし、今年は生ける伝説とまで言われる名人を相手に何とか初防衛を果たし、名人の永世七冠とタイトル通算１００期達成を阻んだ。
そんなこんなでようやく周りも本格的に俺のことを〝竜王〟として見てくれるようになってきたが、順位戦では一番下のＣ級２組。
この順位戦というのは名人へと繋がる道であると同時に、その名の通りきっちり順位を付けられるので、棋士としての格に大きく関わってくる。下世話な話だけど、対局料もクラスによって違う。
棋士の多くにとっておそらく最も大事な棋戦、それが順位戦だ。
俺はここでようやくほっと一息つくと、僅かに残っていた水を飲み干してから感想戦に移ろうと思った……その時。
ふと盤側に座る記録係が視界の端に映り、思わず驚きの声が漏れた。
「えっ」
そこにいたのは、眩しい程の白い肌に美しい銀髪が目立つセーラー服の美少女。
まるでファンタジーの世界から飛び出して来たような幻想的な印象も受けるその少

女だが、俺の知り合いでもあった。
その少女は、奨励会三段、女流二冠にして俺の姉弟子、空銀子。
俺の視線に気付いた姉弟子は、怪訝そうな目を向けてきて。
「……なにか？」
「あ、い、いえ、何でもないです……」
そ、そういえば、今日は姉弟子が記録係だったんだよな……朝に一度驚いたのに、夜にもう一度同じように驚いちゃったよ、すっかり忘れてた。
でもこれ、姉弟子に言ったら絶対殴られるから黙っておこう。

▲▲▲

「さむっ！」

関西将棋会館から一歩出ると、冬の夜の冷たい風が全身を撫でた。
対局室は暖房も効いているし、対局中に思考を加速させていると熱くなるくらいだ。
それだけに、この急激な変化に体がついていけてない。
俺は体を震わせながら、せめてもの寒さへの抵抗とばかりにコートの襟を立てて両手

で押さえる。
　隣ではそんな俺を見ながら姉弟子が。
「私も寒い、そのコートちょうだい」
「い、いやですよ、俺のこの様子を見てそんなセリフ出てくるとか、あんた鬼ですか……」
　普通の人なら冗談と受け取るところだが、姉弟子に限っては本気で言ってる可能性も十分考えられるので、俺はしっかりとコートを掴んで警戒する。
　姉弟子はむすっとした顔で。
「こんな時間まで対局を長引かせた八一が悪い」
「仕方ないじゃないですか、持ち時間が長い順位戦なんですし。それに今回は相手の研究通りに序盤から上手く指されてしまって……」
「一応タイトルホルダーの八一に対して、順位戦でとっておきの研究ぶつけてくるなんて十分想定できることじゃない。何とかしなさいよ」
「い、一応って……まぁでも、結果的には何とかなったじゃないですか。序盤で作戦負けはしちゃいましたけど、そこから挽回できましたし。最近感じるんですけど、相手がよく練ってきた研究に対して、読んで読んで挽回の手を捻り出せると結構快感なんですよね。高難度の詰将棋を解いた時みたいに。いつも相手の研究を受けて立つ名人もこういう気持ちあったりするんですかね」

「なるほど、『相手が苦労して何日もかけて練ってきた研究を、その場でちょっと読んだだけで粉砕して才能の差を見せつけ相手を絶望させるのが楽しい』ってわけね。八一も竜王らしくなってきたじゃない」

「そんなこと言ってないよ!?　あと姉弟子は竜王にどんなイメージ持ってるんですか！」

棋士仲間の歩夢なんかは、中二病を発症しているせいで竜王を悪の魔王みたいに見立てていたりもするが、姉弟子はそんなキャラじゃないだろう。

でも、実際のところ今期の竜王戦七番勝負でも『正義の名人ｖｓ悪の竜王』みたいな扱いだったのは確かで、やりづらい事この上なかった。いや、名人の人気はよく知ってるけどさ……。

俺の言葉に、姉弟子はさらりと。

「竜王のイメージ？　ネット上では、『幼女の力で覚醒して名人を倒した究極のロリコン竜王』ってタイトルでまとめサイトにも記事があがってたけど？」

「ち、ちがっ、確かに周りの皆のお陰で最後まで戦えたっていうのはあるけど、別に幼女だからってわけじゃないから！　弟子二人とかＪＳ研の皆とか、たまたま周りに幼女が多かっただけだから！」

「でも、竜王戦第四局の指し直し前に、弟子のＪＳの膝枕で色々と回復してたってネット

に」
「それ絶対姉弟子か鵠さんがリークしましたよね!?　関係者以外知りようがない情報じゃないですか!!」
　ネット上ではすっかり俺がロリコンってことで定着してきているが、どうも姉弟子がそういう情報を流しているように思えてならない。最初に姉弟子が言い出した『ロリ王』とかいう不名誉極まりないタイトルもネットでよくネタにされてるし……。
　あと、鵠さんに至っては観戦記だとか棋譜コメだとか公式の場に俺のロリコンを匂わせるようなことを書いてくれやがるから本当に洒落にならない。
　俺もＪＳを内弟子にしたり、ニコ生で幼女にキスされたり、そう思われても仕方ない部分はあるのかもしれないけど……。
　姉弟子は冷ややかな視線をこちらに向けて。
「八一ってあの竜王戦第四局からは特に調子いいわよね。あれからずっと連勝してるでしょ。ＪＳの膝枕でレベルアップして、何をしてても常に頭の中にロリが浮かぶようになったんだっけ?」
「ＪＳの膝枕は関係ないですし、頭の中に浮かぶのはロリじゃなくて将棋盤です!　まぁ、あいの膝枕が心地良かったのは確かですけど……」
「変態。ロリコン。通報する」

「やめてください社会的に死んでしまいます」
ケータイを取り出した姉弟子を必死で止める。この人は冗談でも何でもなく本当に通報してもおかしくない。
俺はとにかくロリから話を逸らす。
「名人との竜王戦で自分の中で壁を一つ越えたような感覚はあります。前よりも手が多く早く見えるようになりましたし、今日の対局も以前までの俺だったら序盤のリードを守られたまま負けてたかもしれません。特に昼食休憩明けは凄く集中できて、気付いたら夜でしたよ」
「そういう時の八一、目が危ないし、どこか別の惑星と交信してるみたいできらい。ずっと頓死すればいいのにって思いながら記録とってた」
「そ、そんなに危ない感じなんですか俺……でも、もうその辺りはどうしようも……というか、姉弟子の場合は俺が何をしてても基本嫌いじゃないですか」
「うん」
当たり前のように即答。
何だか精神的にどっと疲れてきて深く溜息をつくと、ふと、あるものが視界に入ってきた。
それは、こちらに向かって仲良さそうに肩を寄せ合って歩いてくるカップルで、すれ

違い様に、
「ほら、寒いだろ？」
「ふふ、ありがと！」
　こんな会話をしながら、男の方が女の手を取って自らのコートのポケットに誘い入れていた。カップルの間ではありがちなシチュエーションというものなんだろうが……。
「……なに？」
「えっ、あ、あー……ほら、さっきのカップル凄く仲良さそうだったなーって」
「そうね」
　姉弟子からはそんな短く素っ気ない言葉が返ってくる。
　……まぁ、そうだよな。
　将棋関係者などからは俺と姉弟子の関係について色々と勘ぐられることは多い。要するに、同門というだけではなく男女の仲ではないかといったものだ。
　でも、実際のところは俺達の間にあるのは将棋だけ。
　あのカップルは仲良く肩を寄せ合っていたが、俺と姉弟子は将棋で寄せ合うことくらいしかしない。将棋の寄せ合いなんてのは、もう殴り合いみたいなものだ。
　……少なくとも、姉弟子にとって俺はただの弟弟子でしかない。
　俺は一時期、もしかしたら姉弟子は俺のことが好きなんじゃないかという恥ずかしい

思い込みをしていたけど、それは二人で桜ノ宮に行った時に粉砕された。もう、舞い上がってた俺が哀れやら愚かやらで、人生の黒歴史として俺の中に残っていくこと間違いなしだ。

いや、でも姉弟子だって色々と紛らわしかったと思うんだ。

特にハワイの時なんて、夜の街を二人で恋人繋ぎをしながら歩いて、別れ際に姉弟子は俺にキスさせようとした。あれで勘違いしない男はいないと思う。

ただ、あの時は姉弟子が本気だったと勝手に思い込んでたけど、やっぱり単にからかってただけなんだろうな……。

そんなことを考えていた時だった。

突然、俺の手に一瞬だけ何か柔らかくて冷たいものが当たった！

「っ!?」

「……？」

首を傾げる姉弟子。

き、気のせいか……？　いや、今確かに……。

ちらっと姉弟子の手に視線を送るが、何事もなかったかのように少し離れたところでブラブラしている。

……偶然当たっただけか？

そ、そうだな、そういうことだろう。というか、もしこれで調子乗って手を握ったりして拒絶されたらちょっと立ち直れない。無理攻め、暴発は避けるべきだ。

それにしても、こんなちょっと手が当たっただけでここまで心臓がバクバクと暴れるなんて本当にどうかしてる……姉弟子とは昔は普通に手を繋いで歩いてたのに……。

これって、やっぱり――――

「２六歩」

「……はぁ」

「投了？」

「しませんよ、二手目投了とか斬新すぎるでしょ。８四歩」

唐突に、いつもの目隠し将棋が始まった。

俺はこんなにもドキドキしながら色々と悩んでいるってのに、姉弟子の頭の中には将棋しかない。うん、分かってましたよ……。

俺は肩を落としながらも、頭を将棋に切り替えようとしていると。

「２五歩」

「えっ」

「……いち、に、さん、し」

「もう秒読み!?　８五歩！」

少し前にも対局室で聞いた秒読みの声に押されるように、俺は次の一手を指す。
別に姉弟子が奇抜な手を指したわけではない。飛車先の歩を突き合う普通によくある流れだ。
俺が意外に思ったのは別のところにある。
これは相掛かりの進行だ。
相掛かりといえば俺の得意戦型の一つで、定跡の整備がほとんど進んでいないため激しい力戦になりやすい形。
俺と姉弟子は今まで数えきれないほど将棋を指してきたが、いつからだろう、姉弟子は俺に相掛かりを挑むことはなくなった。
そして今では……特に俺が名人を倒して竜王を防衛してからは、姉弟子だけではなく、プロ棋士達も俺に対してこの戦型を選択することはなくなった。
俺が公式戦で相掛かりの将棋を指したのは、あの竜王戦第四局の名人との対局が最後。
ちなみに、弟子のあいは相掛かり大好きなので、家では結構指している。
姉弟子にも何か心境の変化というものがあったんだろうか。
淡々と指し手を進めていきながら、ちらりとその横顔を見てみるが、指し手は読めても心の内までは読むことはできない。

でも、そうだよな。姉弟子はもう奨励会三段、プロ一歩手前まで来ている。そこまでいったら、プロ相手でも力戦で十分勝てるってくらいの自信は持っていないといけない。姉弟子はそういったことを考えているのかもしれない。

それから俺も将棋だけに集中し、人通りも少なくなった夜の街には俺と姉弟子の指し手を示す言葉だけが響いていた。

△△△

姉弟子はそのまま普通に俺のアパートまでやって来た。うん、知ってた……。

今日は順位戦で夜遅くなることは分かっていたので、あいは師匠の家で預かってもらっている。だからいきなり俺の部屋が戦場になることはないけど、後でこの事をあいに知られたらとんでもない事になりそうだ。

とはいえ、こんな時間にＪＣを一人で放り出したらクズ竜王とか言われちゃうし、かといってこうやって家に連れ込むってのもそれはそれでクズなんじゃ……詰んでますね、これ。

ちなみに、目隠し将棋の結果は。

「……ふん、八一も少しはやるようになったじゃない」

「そ、それはどうも……」

一応竜王である俺を、遙かなる高みから見下ろしながら投了する姉弟子。大物すぎる。

今日は始めからここに泊まるつもりだったらしい姉弟子は、着替えなんかもきっちり用意していて、さっさとシャワーを浴びて寝間着に着替えると、俺のベッドに寝っ転がって棋書をペラペラとめくり始めた。まるで自分の部屋であるかのようなくつろぎっぷりだ。

当然のように俺のベッドが占拠されてしまったわけだが、抗議したところでどうにもならないのは長い付き合いからよく分かっているので、俺もさっさとシャワーを浴びることにした。

対局での汗や疲れを流してさっぱりした俺は、冷たい麦茶を飲みながら部屋に戻ると、姉弟子は相変わらずゴロゴロしながら今はケータイをいじっている。多分どっかの対局の棋譜でも見てるんだろう。今はアプリで簡単に見られるようになったし。

と、ここで姉弟子の髪が濡れたままなのに気付く。

「姉弟子、髪乾かしてくださいよ。風邪ひいちゃいますって」

「八一、乾かして」

「か、乾かしてって……姉弟子ももう中三なんですから、流石にそのくらい一人で」

「じゃあいい、ほっとく」
「ああもう！　分かりましたよ、乾かせばいいんでしょ！」
確かに師匠の家での修行時代は、俺が姉弟子の髪を乾かす係だったけど、今思えばいくら何でも甘やかし過ぎな気がする……結局言うこと聞いちゃうんだけど。
俺はドライヤーを持ってくると、姉弟子の後ろに回って髪を乾かし始める。
……相変わらず髪の毛さらっさらだな。
髪色も現実離れしたような綺麗な銀色だし、肌も真っ白できめ細かくて……あれ？　なんか赤くなって――
「えっち」
「な、なにが!?　何ですか突然!!」
「今変なこと考えてたでしょ。私のうなじ見ながら」
「なんで分かっ……ごほん！　見てませんって、姉弟子の髪を乾かすのなんて昔からですし、うなじも見慣れてますよ。今でも時々あいの髪を乾かしたりしますし」
「……へぇ。つまり、八一が興味あるのはＪＳのうなじだけで、ＪＣのうなじは眼中にないってこと？　ＪＣはババアってわけ？　また鵠さんが食いつきそうなネタが出てきたわね、今度教えてあげることにするわ」
「ごめんなさい、許してください」

この人は本当に隙あらば俺を社会的に頓死させようとしてくるな……。

もうここはお互い余計なことを考えないように、本分である将棋の話でもしよう。

「それより、この後どうします？　今日の俺の対局をもうちょっと検討してみます？　それともＶＳでもやりますか？」

「……八一あんた、順位戦のあとなのに疲れてないの？」

「いやー、体の方は疲れてるのかもしれないですけど、頭の方はかなり冴えてるんで。まだ結構やれると思いますよ。あと、対局後って頭の中の盤が全く消えなくて、寝ようとしても勝手に駒が動き出すんで中々寝付けないんですよ」

「それは自慢のつもり？　はいはい、将棋星人はすごいわね」

「自慢じゃないですって！　薬飲んで無理矢理寝ることもしょっちゅうですし、割と深刻な悩みなんですよ！」

「それが贅沢な悩みだっつってんのよ。あと、検討もＶＳもやらない。寝る」

「へっ？」

俺は思わず姉弟子の髪を乾かす手を止めて、間抜けな声を出してしまう。

「指さないんですか？　姉弟子が？　食べることや寝ることより指すことを優先する姉弟子が？　生活能力とか女子力とかを全て犠牲にして棋力に全振りしてるような姉弟子がごばっ!?」

言葉の途中で、姉弟子の後頭部が俺の顔面に激突した！　いってえ！
もろに鼻に入ったので涙目になっていると、姉弟子は不機嫌そうな低い声で。
「単に記録係で疲れただけよ。偉い偉い竜王サマは、記録係もそれなりに疲れるってことはもう忘れちゃったのかもしれませんけどね」
「そ、そんなことないですって……でも、ちょっと安心しました。姉弟子にも将棋より何かを優先する人間らしい部分が残っていたんですね」
「ぶちころすぞわれ」
まぁ姉弟子が寝るというのなら、俺もそうすることにしよう。
考えてみれば、いくら眠れないからといって将棋を指していては更に眠れなくなるだけだ。今日の十二時間以上にも渡る対局は間違いなく体にも負担がかかっているし、十分に休まなければ体を壊してしまうかもしれない。
人間ってのはメリハリが大事ってのも聞いたことがあるしな。
棋士だって人間である以上ずっと将棋漬けってわけにもいかないし、休む時は思い切り休み、遊ぶ時は思い切り遊ぶ、そういう切り替えが大事なんだとか。
俺は姉弟子の髪を乾かす作業を再開しながら。
「あ、そうだ、姉弟子。明日はあいが帰ってくる前にここを出てもらいたいんですけど……鉢合わせとかしたら、とてつもなく面倒なことになる予感しかしないし……」

「どうして私が小童に気を使わなきゃいけないのよ。前に私がここに来た時、八一はJSに囲まれて寝てたこともあったくせに」
「うっ……で、でも、あれはあくまで研究会で……」
「じゃあ私のことも、同じように研究会だって説明すればいいじゃない。というか、八一にとってあの小童は何なのよ、正妻かなんか？　私は愛人ってわけ？」
「あいはあくまで弟子ですって！　ただ、あいは自分が一番弟子だっていうところに拘りがあるみたいで、こうやって隠れてコソコソみたいなことは嫌うんですよ。よく『あいが一番ですよね？』って聞いてくるし……」
「頓死すればいいのに」
「なんで!?」
最近姉弟子から唐突に死ねと言われることが増えた気がする。まぁ以前からもそこそこあったけども。
姉弟子は俺の言葉には答えず、部屋にはドライヤーの音だけが響く。
こういう時の姉弟子は下手に何かを言うと酷いことになることが多いので、俺はただ黙って姉弟子の髪を乾かすことに集中する。
しばらくして、姉弟子がふと思い出したような口調で。
「……研究会といえば」

「ん？　研究会がどうかしましたか？」
　また沈黙。
　一体どうしたんだろう……中々話が進まずもどかしいが、踏み込むと手痛いことになりそうなので、じっと姉弟子の言葉を待つ。
　……あれ、なんか姉弟子の首筋が赤くなってる？
　ドライヤーを当てすぎたんだろうか、姉弟子は肌が弱いから注意が必要だ。
　そんなことを思っていると、姉弟子は続きを話し始めた。
「関西の若手棋士の研究会があるんだけど、私、そこに誘われて入ることにした」
「え……あの、その研究会って女流の人とかは」
「いない。女は私だけ」
「……そうですか」
　別に男だけの研究会に女性が一人で飛び込むのは珍しいことでもない。
　鹿路庭さんのように熱心に研究会に参加する人なんかはそういう事は多いし、そういう人の方が伸びる。
　特に姉弟子は、あの生石玉将の研究相手に選ばれる程、膨大な研究量を持つ。まだ奨励会員とはいえ、研究会に誘いたいという者は少なくはないだろう。
　そして、それは姉弟子にとっても確実にプラスになるものだ。

つまり、姉弟子のプロ入りを願う俺にとっても喜ばしいことのはずだ。

でも、なんでこんなに胸がモヤモヤするんだろう。

「……あの、その研究会、俺も参加ってできないですかね？　俺も関西若手の一人ですし、力を合わせて関西を盛り上げていくって感じで……」

「ダメ」

「な、なんで!?」

「……八一あんた、自分が関西若手の間でどんな存在になってるか分かってる？」

「どんな存在って……」

姉弟子に言われて、すぐに思い出したのは新年の指し初め式でのことだった。

一年前、俺が竜王を獲得してすぐの指し初め式では、『竜王に教えてもらおうぜ！』みたいな軽いノリで、皆でワイワイ楽しく指した。いや、俺は研究ぶつけられまくってボコボコにされたから全然楽しくなかったけど。

それが今年の指し初め式では、状況が一変していた。

みんな去年の気軽さはどこにもなく、どこかよそよそしい感じで遠巻きに俺のことを見ていただけで、俺の前に座ったのは生石さんくらいだった。

「……なんか、最近みんなから距離を置かれてるなってのは感じるけど……もしかして俺、嫌われてる……？」

「嫌われてるっていうのとは少し違うわね。畏れてるのよ、八一のこと」
「えっ……俺を？　なんで？」
「……」
「いたっ!!　痛い痛い痛いっ!!!　な、何するんですか!?」
姉弟子は無言で俺に肘を打ち込んでくる。
そして忌々しげな声色で。
「八一、あんたは名人との竜王戦で明らかに別の次元にいった。それは棋士なら誰もが思っていることよ。少なくとも、あんた以外はね」
「……」
買いかぶり過ぎだ、と思う。自分の力は自分でよく分かっているつもりだ。
確かに俺は、名人の竜王挑戦をはねのけ、永世七冠を阻んだという形にはなったが、あらゆる面においてまだまだ名人の方が上だと思っている。
そう言おうと思ったが、すぐに喉元まで出てきていた言葉を飲み込んだ。
何か、姉弟子の背中から黒いオーラのようなものが見えるからだ。たぶん、そのまま言ってたら殺られてた……。
代わりに、俺は別の疑問を口にする。
「……でも、そこまで俺のことを評価してくれているなら、研究会に入るのも歓迎してく

れてもいいような……」

「八一が２０代半ばとかだったら歓迎されたかもね。それこそ、さっきあんたが言ったように『一緒に関西を盛り上げていこう』、みたいにね。でも、あんたは若すぎるのよ」

「若すぎる……？」

「多くの棋士にとって、自分達より下の世代の強者が一番恐ろしいものでしょ。上の世代の人達は自分達より先に衰えて、この世界から去っていく。でも下の世代の人達とは、現役の間ずっと戦っていくことになるわけだし、先に衰えるのは自分達の方。だから、絶対に年下には先を越されたくない。それはつまり、自分達の時代を築けないまま、次の時代に飲み込まれることに繋がるから」

「そういうもの……なんですか？　でも、例えば年下の創多なんかは、俺より出世スピード早いし、すぐ上まで来そうだけど、そんなギクシャクしたりはしないと思うけどなぁ……向こうも俺のこと慕ってくれてるし」

「……将棋星のお貴族サマは下々の者の考えなんて理解できないってことね。そうよね、八一といい、名人といい、本人はただ真っ直ぐ進んでるだけで、周りが勝手に騒いでるだけですものねぇ？」

　将棋星とか貴族とか言ってることはよく分からないけど、姉弟子がお怒りだってことは分かる……俺と創多より、俺と姉弟子の方がよっぽどギクシャクしてる……。

それから姉弟子はキッパリと。

「とにかく、その研究会は関西若手が少しでも八一に追いつこうって意図もあるんだから、そこは空気読みなさいよ」

「わ、分かりましたよ……でも、ちょっと聞きたいんですけど、その研究会ってどこでやるんですか？　もしかして誰かの家、とか？　あと、何時くらいまでやるんですか？　あまり遅くなるのは……」

「……そんなの八一には関係ないでしょ」

「っ……そ、そりゃあ関係ないかもしれないですけど……！」

「私だって子供じゃないんだから、自分で考えて自分で決められる」

突き放すような姉弟子の言葉に、俺は何も言えなくなる。

いや、未だにこうして弟弟子に髪を乾かしてもらってるのに子供じゃないのかとか色々と言いたいことはあるんだけども。

……でも、そうだよな。姉弟子だって、これから三段リーグを戦っていくということをしっかり考えて決めたんだと思うし、いくら弟弟子だからってグチグチと口を出すべきじゃない。姉弟子がプロ棋士になることを願うなら、応援するべきだ。

こんな胸の痛みは俺の身勝手に過ぎず。

姉弟子にとって、何の得にもなったりしないのだから。

どこへ行くにも二人で手を繋いでいた時とは、もう違うのだから。
俺は暗い感情を吐き出すように一度小さく息を吐いて心を整える。できるだけ明るく、いつも通り話せるように。
そして、姉弟子の背中を押す言葉をかけようと口を開きかけた時。
姉弟子が急にこっちを振り返った！
「っ……ど、どうしたんですか？」
「……」
予想外の一手を放たれてバクバクと跳ねる心臓を何と沈めようとしながら、努めて冷静に尋ねる。たぶん周りから見たら全然冷静じゃない。
姉弟子は少しだけ俺の目を見たが、すぐに顔を伏せて髪で視線を隠すと、小さな小さな声で何かを呟いた。
「……るの？」
「え、なんですか？」
ドライヤーの音で全く聞こえなかったので一旦スイッチを切る。
それから姉弟子はしばらく黙り込んでいたが、再び口を開いて。
「もしかして八一……嫉妬してるの？」

「なっ……!?」

せっかく収まり始めていた心臓がまた大きく跳ね上がった。

最近では対局中でもこんなに動揺したことがない。ひょっとしたら、あの名人のマジックをくらった時と同じくらい心を乱されているかもしれない。

流石にすぐには言葉が浮かばなく、部屋には沈黙が流れる。

ど、どうする……あまり沈黙が長いと、それが答えみたいになっちゃうし……な、何か言わないと……！

焦った俺は、とにかく思いついたままに言葉を捻り出す。

「は、ははは、急に何を言い出すんですか姉弟子は。そ、そんなわけないじゃないですか、姉弟子はもう家族みたいなものですし！　姉弟子ってコミュ力に問題ありますから、ちゃんとやっていけるのかなって心配なだけで……！」

「……」

「ほ、ほら、変なこと言ってないで、髪乾かしますから向こう向いてください」

そう言って再びドライヤーのスイッチを入れて、姉弟子の髪を乾かす作業に戻る。

よ、よし、あまり上手い言い訳ではなかったかもしれないけど、何とか力技で誤魔化せたみたいだ。

そう思ってほっと一息ついた、その瞬間。
ドライヤーを持つ俺の手に、姉弟子のすべすべした手が重ねられた！
「!?」
な、なんだ……なんだこの手は!?
待て、落ち着け、よく考えろ。この手はきっと何か深い意味があるはずだ。よく読め。読んで読んで、ここでの最善の一手を……！
「八一、私の髪、もう乾いてる」
「えっ!?　あ、は、はい！」
慌ててドライヤーのスイッチを切る。
い、言われるまで気付かなかった……！
どうしよう、これ確実に動揺してるのバレたよな？
これはもう下手に言い訳を重ねるのは悪手……？　正直に『本当は嫉妬してました』って言って……いやいやいや！　そんなこと言ったら『キモ、あんたのことなんて将棋以外はどうとも思ってないんですけど？』とか言われて頓死は免れない……!!
「……桂香さんが言ってたんだけど」
「は、はひっ!?　なんて!?」
まだ何かあるのか!?

これ以上の攻めは、もう受けきれな――――

「八一は私のことが好きなんじゃないかって」

あ、詰みました。

銀桂研究会

「ねぇ銀子ちゃん、最近八一くんと何かあった？」

八一の順位戦の一週間程前。

師匠の家で桂香さんと研究会をしていて一段落ついた時、桂香さんからふと思い出したようにこんな事を尋ねられて、私の心臓は高く跳ねた。

急にどうしたのだろう……何かあったかと聞かれれば色々あったけど、どの事について勘付かれているかが分からない。

原宿でのことならそこまで痛くはない。でもハワイでのことなら少し恥ずかしい。桜ノ宮でのことならかなり恥ずかしい。

とりあえず、ここは相手の手を見ることにする。

「……何かって？」

「うーん……キスした、とか？」

「そ、そんなことしてないっ！　するわけないでしょ！」

正確には八一にキスさせようとしたことはあったし、もっとすごい事をしようとした事もあったけど、そんなこと言えるわけない。

でも、桂香さんは私が何かを隠していることはお見通しらしく、口元に柔らかい笑みを浮かべて。

「キスまではしてない……か。じゃあキスしそうになった、とかかな？」

「そ、そもそもなんでキスとかそういう話になるのよ。私と八一は別にそんな関係じゃ……」

「でも八一くん、いつからか、よく銀子ちゃんの手とか唇見ることが多いよ？　たぶん、夏のマイナビ予選の頃からかな。気付いてなかった？」

「っ!?」

あのばか！　へんたい!!

八一はいつだってそうだ、対局中も形勢が顔に出すぎるし、分かりやすいにも程がある。

「まぁ、銀子ちゃんも同じように八一くんのことチラチラ見てるんだけどね」

「み、見てない！　全然見てないから!!」

「私も基本的にそういう事には口を挟まないようにはしてたんだけど、あまりにも二人がむず痒い空気を出してるから、こっちまで居たたまれなくなっちゃうのよ。お互いあ

と一歩を踏み出せずに、千日手模様になってる感じよね」

「……」

私は無言で押し通すことにした。

将棋では自分の手番になれば必ず何か一手指さなければいけないが、現実ではそうじゃない。この局面は何を言っても悪くなる予感しかしないので、黙ってやり過ごすのが最善手のはず。

桂香さんはそんな私を見てクスクスと笑いながら。

「八一くんは銀子ちゃんのこと好きだと思うよ?」

「……そんなこと、ない。八一は将棋にしか興味ない」

黙っていようと思った矢先につい返事してしまった……でも、桂香さんがいきなり変なこと言うから……。

桂香さんは困ったように笑いながら続ける。

「うん、前まではそうだったと思う。でも、今はちょっと違うと思うな。明らかに銀子ちゃんを見る目が、姉弟子に向けるものから女の子に向けるものになっているもの」

「だって、八一が言ったもん!『そういう相手を見つける気になれない』とか『将棋が恋人』って!」

「えっ、銀子ちゃんもしかして……告白したの?」

「し、してない！　私はただ、『17歳なのにしたことないの？』って聞いたら、八一が……」
「ん？　したことないって……キスのこと？」
「えっ……あ、う、うん、そう！　キ、キスのこと！」
本当はキス以上のもっとすごい事だけど、そんなこと言えるわけがない。
今考えたら、あの時の私はいくら追い詰められていたとはいえ、平然ととんでもない事聞いてたな……。
「うーん、たぶんだけど、八一くんは自分の気持ちに気付いてないだけだと思うのよね。彼の頭にあるのは今まで将棋ばかりだったから、そういう感情に戸惑ってるんじゃないかしら」
「でも……あいつは将棋星人だし……私のことなんて、将棋以外では全く見てくれなくて……」
「銀子ちゃん」
桂香さんは私の頬を両手で包み込むようにすると、優しい笑顔で。
「私は将棋では八一くんや銀子ちゃんの手は全然読めないけど、それ以外のことなら誰よりも読める自信あるよ」
「……」

桂香さんの言葉に、私は何も反論できない。

実際、いつだって桂香さんの言葉は正しくて、私や八一が何か困った時は必ずと言っていい程助けてもらった。

将棋では私と八一は桂香さんよりも先輩だけど、人生では桂香さんの方がずっと先輩なんだ。

桂香さんは少し考えたあと。

「じゃあ、ちょっと試してみるっていうのはどうかな？」

「試してみる……？」

「うん、例えばね……並んで歩いてる時に、偶然を装って八一くんの手にちょっとだけ触れてみる、とか。それで反応を見るの」

「……な、なるほど」

私は思わずメモを取る。

相手の出方を見てから、こちらも指し手を決めるというのは将棋でもよくあるテクニックだ。まさかそれが現実でも応用できるなんて……！

要するに、もしも八一が本当に私のことが好きだった場合に、絶対に何かしらの反応を見せてくれるようなアクションを起こせばいい。

ということは、逆に考えて、八一が同じようなことをした時に私が反応するようなこ

と、ということにもなる。
　自分のことなら考えやすい。
「他には、私が若手プロ棋士だけの研究会に誘われてる……っていうのはどう？　実際誘われてるし……八一の馬鹿が家でＪＳ研なんていうふざけたものやってた時はムカついたし……」
「うん、それもいいと思う！　八一くん、絶対嫉妬するよ！」
「や、八一が嫉妬……か……」
　いつもは私が嫉妬してばかりだけど、逆に八一が嫉妬するっていうのは新鮮だ。それに、悪い気はしない……何か、大切にされてる気がするし……。
　桂香さんはぐっと握りこぶしを作ると。
「頑張ってね、銀子ちゃん！　あいちゃんには悪いけど、やっぱり八一くんは銀子ちゃんとくっつく方が色々と健全だと思うの！　特に最近はあいちゃんがかなり攻めてて、八一くんが本当にそっち方面に行っちゃいそうで……流石にそれは法律とか危ないし……ね？」
「……八一のやつ、あの小童と何かしてたの？」
「あー……ちょ、ちょっとね！　うん、たぶん今ならまだ間に合うと思うから大丈夫!!」
　桂香さんの焦りようを見ると、一体何を見たのかとても気になるところだけど、この

様子だといくら聞いても教えてくれないだろう。

とにかく、八一の周りには危険な女が多い。

動くなら少しでも早い方がいい。ちょうど八一の順位戦の記録係をすることになっているし、狙うならそこしかない。

それから私は、桂香さんという心強い人生の先輩のアドバイスを聞いて、作戦を練っていった。

ちなみに、恋愛でいえば桂香さんもあまり経験豊富とは言えない気がしたけど、そこは黙っておくことにした。たぶん、それ言ったら桂香さん、大荒れ状態になりそうだから……こんなに親身になってくれているのに、そんな仕打ちはできない……。

勝負手

部屋には重苦しい沈黙が流れている。

姉弟子はじっと俺の目を見たまま、視線を逸らそうとしない。どうやら逃がす気はさらさらないようだ。

桂香さんの言葉は強い力を持つ。なぜなら、いつも正しいからだ。

そして、俺は桂香さんの言葉にはいつも助けられている。それは姉弟子とケンカした時や、俺が名人との対局でボロボロになった時……桂香さんの言葉はいつも俺の背中を押してくれた。

その桂香さんが「八一くんは銀子ちゃんのことが好き」と言ったなら、それはつまりそういう事だ。むしろそれを聞いて、俺自身もやっぱりかと納得しているくらいだ。

状況的には、先程から姉弟子による連続詰めろを何とか逃れていたが、ついに必至をかけられてしまったという感じだ。もうこれはどうしようもない。

必至がかかってしまったのなら、するべきことは一つしかない。

王手をかけて攻める。

例えそれが、明らかな無理攻めだったとしても。

「その通りです。俺は姉弟子のことが好きです」

俺の言葉に、姉弟子は目を大きく見開いた。

これでもう戻れない。人生には待ったはない。だから、進むだけだ。

「夏に二人で、原宿の釈迦堂さんのところに研究会に行きましたよね。その時の姉弟子のドレス姿を見てから、姉弟子ってこんなに可愛い人だったんだって気付いて、女の子として意識するようになって……いや、もっと早く気付けって話かもしれないですけど……」

「……でも八一、今はそういう相手を見つける気になれないって言ったじゃん……桜ノ宮で……」

「それは……姉弟子を困らせたくなかったんです。いや、そう言うことで失恋の痛みを誤魔化していただけかもしれません」

実際は、全然誤魔化すことなんてできなくて、ズキズキと胸は傷んでいたわけだけど。

姉弟子は困惑した表情を浮かべて。

「失恋……？」

「はい。姉弟子が俺のことをどう思っているのかっていうのは、桜ノ宮でよく分かりましたから……はは、それももっと早く気付けって話ですね。恥ずかしい話ですけど、俺、ひょっとしたら姉弟子は俺のことを好きなんじゃないかとも思ってたんですよ。それで勝手に期待して勝手に落ち込んで……すいません」

「……」

「姉弟子にとって俺はあくまで弟子で、それ以外の何でもないというのはよく分かっています。だから、今話したことは全部忘れちゃってください。それで、明日からいつも通り変わらず接してもらえると、ありがたいです」

そう、これは一応攻めてはいるが、その攻めが届かないことは知っている……要するに形作りみたいなものだ。

俺の気持ちを知られてしまった以上、こうやってまとめるのが一番だと思った。

俺はベッドから立ち上がりながら、姉弟子の方は見ないようにして。

「それじゃ、俺は和室で寝るんで、姉弟子はそのベッド使ってもらって――」

そこまで言った時、後ろから服の裾を掴まれた。

「姉弟子？　どうしましいいいいいっ!?」

振り返る瞬間、相当な力で思い切り引っ張られた！

そのまま訳も分からないままベッドの上に転がされて、そして。

ぎゅっと、姉弟子は俺に抱きついて、胸のあたりに顔を押し付けてきた！

「ちょっ、ま、まさか、また抱き枕になれとか言う気ですか……!?　あの、自分で忘れてほしいって言っといて何ですけど、さっきからの流れでこういう事されると結構気まずいものがあるんですけど……姉弟子？」

何か様子がおかしい。

姉弟子は俺の胸に顔を埋めたまま何も言わないし、微かに震えているような気もする。

これは流石に放っておけないので、とにかくどうしたのか聞こうと再び口を開こうとした……その時。

「……ぐすっ」

泣　い　て　る　！　！

やばい、完全にやらかした。

これどう考えても、さっきの俺の告白のせいだよな!?　な、泣くほど嫌だったのか……いや、凹んでる場合じゃない！

夜中にＪＣを部屋に連れ込んで泣かせる男とか、もう完全にクズだ。

鵠さんに『クズ竜』とか書かれても何も言えなくなる。
「す、すいません姉弟子！　急にあんなこと言われて気持ち悪かったですよね！　え、えっと、その、もしアレだったら今からでもタクシー呼びますんでごばっ!?」
言葉の途中で頭突きをくらった。
痛いけど、今すごい良い匂いした……変態みたいだな俺。
ここで姉弟子は顔を上げて俺を見た。
至近距離から見る姉弟子の目は赤くなっていて、やはり涙が浮かんでいる。
「ばかやいちっ！　鈍感!!」
「ごめんなさいごめんなさい!!　急に俺なんかから告白されたら嫌に決まってますよね!!　そこまで気が回らなくて、本当に俺……」
「だからどうしてそうなるのよ!!　どうして私が八一のことを何とも思ってないなんて決めつけて話進めてるのよ!!」
「どうしてって……」
姉弟子の言葉に、今度は俺が困惑した。
「だって、姉弟子が自分で言ったんじゃないですか。桜ノ宮のホテルで、俺のことが嫌いだって……」
「……八一あんた、将棋指してる時、相手の手を見て意味を一つしか考えないの?」

「いや、もちろんそんな事はないですけど……プロってのは複数の含みを持たせた手を指すのが当たり前ですし……えっ、じゃあ、つまり……」

将棋に例えられて、ようやく姉弟子が言いたいことが分かった。

なんというか、我ながら呆れるくらいの将棋脳だな……と思いながら。

「姉弟子が言ってた〝嫌い〟って言葉には、別の意味があった……っていうことですか？　でも、別の意味と言われても、中々思いつかないんですけど……」

「あの時、私が八一のことが嫌いだって言う前、八一はなんて言った？」

「俺ですか？　えーと……確か、姉弟子がシューマイ先生の言うことを真に受けて馬鹿なことをしようとしてるから『こんなことはやめてください』って」

「そのあと」

「そのあと？　えっと、『好きでもない相手とそういうことをしようだなんて』……だったかな？」

「……」

「……あ、あの、姉弟子？」

この言葉は自分で言ってて胸が痛いけど、姉弟子が言えって言うから我慢して言っているのに、姉弟子は見る見る機嫌が悪くなっていく。

「……だから、嫌いなのよ」

「その……そういうお節介なことを言うから……ですか……？」
「私のことなんて何一つ見てくれないからよ！」
　姉弟子の目から、涙がポロポロとこぼれた。
「何が『好きでもない相手とそういう事するな』よ！　私が!!　本当に!!　好きでもない相手とそういう事する女だって思ってるの!?」
「あっ、い、いえ、もちろんそんな事は……え？」
「ハワイの時だってそう！　私は八一にキスさせようとしたけど、あんな事、何とも思ってない男相手にすると思ってるの!?」
「……あの、姉弟子。それって」
　冷えきった心臓が、再び高鳴り始めているのを感じる。
　これもまた俺の勘違いなんだろうか。姉弟子の言葉を良いように解釈して、一人で舞い上がっているだけなんだろうか。
　姉弟子は涙を拭うこともせずに、続ける。
　今まで溜め込んでいたものを、全て吐き出すかのように。
「何が『ひょっとしたら姉弟子は俺のことが好きなんじゃないか』よ！　桂香さんなんてずっと前から知ってた！　八一の弟子の小童だって最初に会った時から明らかに気付いてた！　供御飯先生も、月夜見坂先生も、釈迦堂先生も!!　皆すぐ気付いてるのに、

ずっと一緒にいた八一は全然気付かない！　八一の頭にあるのはいつも将棋のことばかりで、私のことなんて全然見てない!!」

姉弟子は桜ノ宮で言っていた。『将棋が強くて、将棋のことばっか考えているところがきらい』と。

姉弟子にとって、俺達の間にあるのは将棋だけ、そう思っていた。

だからこそ、姉弟子はその将棋で俺に上を行かれているのが許せない、そう思っていた。

姉弟子は再び俺の胸に顔を押し付けて。

「それなのに、急に私のことが好きだなんて言い出して……しかも言うだけ言って忘れてほしいなんて……本当に何なのよこのばか……ばかやいちっ……!!」

「……すいません」

「謝るな、ばか……」

頭がパンクしそうだ。

〝嫌い〟と言われて、その意味が〝私のことを見てくれないから嫌い〟というところまで読むなんて、無理ゲーとしか思えない。一歩間違えば、ただの痛い勘違い野郎だ。

でも、世の中のデキる男というのは、そういうところまで読めるものなんだろうか。もしそうなら凄すぎる……プロ棋士なんて目じゃないだろ……

ただ、これはもうそういう事……なのだろうか？
さっきからの姉弟子の言葉を聞いていれば、俺でも一つの答えを導き出すことはできる。
……でも、それは本当に正しいのだろうか。
また俺が想像もつかないような、別の意味があるんじゃないだろうか。
そんな考えが頭の中でグルグルと回って、中々核心の部分を聞くことができない。聞くのが怖い。
ただ、いつまでも黙ってはいられない。
姉弟子がここまで言ってくれたんだ、俺も勇気を持って踏み込むしかない。
「……その、つ、つまり、姉弟子は……俺のことが好きなんですか？」
聞いて、答えを待つ。
まるで審判を待つ罪人のようだ。
次に姉弟子から返ってくる言葉が不安で、冷や汗さえ出てくる。
名人との竜王戦第四局で、指し直しが決まるかどうか待っていた時でさえ、ここまで緊張はしなかった。
しばらくの沈黙。
時間的にはほんの数分のことなのかもしれないが、俺にとっては何時間にも感じら

れ、その間ガリガリと神経をすり減らされているようだった。
姉弟子は答えた。
「うん。私は、八一のことが好き。ずっと……ずっと前から」
目に涙を浮かべて、頬をほんのりと赤く染めて、俺に抱きついたまま至近距離からそう言った姉弟子。
デキる男なら、ここですぐに何かキザなセリフの一つでも言いながら、女の子の頭を撫でるくらいのことが出来るのだろう。
でも、そんな芸当は俺には不可能だった。
俺はただただ、姉弟子に目を、心を奪われ、何かを言う余裕なんてない。いつも頭に浮かんでいる将棋盤でさえ、この時だけは消え失せていた。
姉弟子は俺のことを将棋星人とか言うけど、やっぱり俺だって人間なんだ。
好きな女の子にこんな事を言われたら、他のことは全て吹っ飛んでしまう、どこにでもいるただの17歳のガキなんだ。
そうやって俺が固まっていると、姉弟子は不満そうに頬を膨らませて。
「……何か言え、ばか」

「……あ、ありがとう？」
「ばか」
コツン、と胸に頭突きされた。
でも、全然痛くはなく、頭突きというかただ寄りかかっただけのような感じなので、俺の返事は最善手とまではいかずとも、少なくとも悪手ではなかったようだ。
少しの間そうしていると、ようやく俺の頭もまともに回り始めてきた。相変わらず心臓はバクバクうるさいけど。
俺は軽く咳払いをすると、姉弟子に確認してみる。
「えっと……つまり、俺と姉弟子は両想い……ってことでいいんですか？」
「うん」
「じゃ、じゃあ……その、お、俺達、これからはこ、恋人……って感じでいいんですか、ね……？」
「ダメ」
「ええっ!?」
まさかの返答が飛んできた！
自分の勝ちを信じて寄せていたら、いきなり大逆転の手を指されて頓死したような……そんな衝撃を受けて呆然としてしまう。

えっ、今完全に付き合う流れじゃなかったの!?

もう全く分からん、将棋よりよっぽど難しいだろ恋愛って……。

「そ、その、両想いなら付き合うってものじゃないんですか……？」

「普通だったらそうかもね。でも、八一は普通じゃないから。将棋星人だから」

「……えっと、俺が将棋星人だったら何が変わってくるんですか？」

「私も将棋星に行かなきゃいけない」

話がどんどん電波な感じになっていく……もうついて行けない……。

そんな俺の様子を察したのか、姉弟子は説明してくれる。

「私も八一が戦っている場所……プロの世界に行かないと、八一から見てもらえないから」

「そ、そんなことないですって！　例え盤を挟まなくたって、姉弟子のことは見てますよ！」

「うん、それは八一が好きって言ってくれて分かったし、嬉しかった。でも、八一と本当の意味で向き合うには、やっぱり将棋しかないと思う。将棋の、真剣勝負しかない。私は、八一にとってこの世で一番大切な、将棋で話したいの。そうじゃないと、自分で自分のことを、八一の恋人として相応しいと思えないから」

「姉弟子……」

その覚悟に、俺はもう口を挟むことはできなかった。
姉弟子の言いたいことがよく分かってしまったから。
俺達は二人共、将棋指しだから。
二人が本当の意味で向き合うには将棋しかない。それは簡単に否定できるものではなく、否定してしまえば、将棋指しとしての姉弟子を否定することになってしまう。
それだけ俺達にとって将棋とは特別なもので、生きる上で切っても切れないもので。
そして、将棋指し同士が最も深く心を通わせる方法といえば、それは絶対に負けられない、己の全てを盤に、相手にぶつける真剣勝負しかない。
俺はそうやって、プロの世界で全力のコミュニケーションをとってきた。
歩夢とも、月光会長とも、山刀伐さんとも、そして、あの名人とも。
そう、若手棋士からは〝神〟とさえ呼ばれるあの名人とだって、あの時、あの瞬間、俺は確かに対等な立場で、盤と駒を使って語り合っていた。殴り合っていた。
俺はあの時、初めて名人を見た気がする。
長い対局で目が充血して、口は半開き、無精髭も伸びていた４０代の中年男性。その姿は〝神〟などとは程遠かった。
それでも、最高にかっこよかった。テレビなどで見るよりも、遥かに。
そして、それを知ることができて凄く嬉しかった。きっとそれは、名人と本当の真剣

勝負をした者しか知ることができないことだから。

真剣勝負というのは、つまりは公式戦ということだ。

プロの棋戦にも奨励会員や女流、それにアマチュアの枠があったりする。

だから、男性プロ棋士と対局するのに必ずしも四段にならなければいけないというわけではない。

でも、姉弟子はそれでは満足できない。

プロになる前の俺だってそうだった。アマや奨励会員としてではなく、プロとしてプロと戦いたかった。三段リーグを抜けた先の世界に踏み出して、そこで戦いたかった。

公式戦で将棋を指す。お互いプロ棋士として、己の全てを賭けて戦う。

それは俺の大切な弟子、あいや天衣とだって一度もしたことがない。

姉弟子とはＶＳは今まで何度もやってきた。でも、公式戦となると、きっと今まで見たことがなかった姉弟子を見ることになる。同じように、今まで見せたことがなかった俺を、姉弟子に見せることになる。それが盤上で本気で語り合うということだ。

そんなの、嬉しいに決まってる。

好きな人と、お互いが一番好きなもので本気で語り合う。それは将棋指しとして、この上ない幸せと言えると思う。

俺は姉弟子の目を真っ直ぐ見ながら、一度だけ深く頷く。

「分かりました。俺、待ってます。姉弟子がプロに上がってきて、俺を倒しにくるのを。俺もこれから勝って勝って、姉弟子が追うに相応しい立派な棋士になって、待ってます」
「……これ以上八一が上に行っちゃったら、例え私がプロになれても中々当たれないじゃん……」
「あっ……」
「というか、今の時点でもプロになってすぐタイトルホルダーの八一と対局するのって大変なのよね。一番可能性があるとすれば順位戦なんだろうけど……」
多くの棋戦において、タイトルホルダーというのはシードされることがほとんどだ。帝位戦なんかは例外だけど。
つまり、新人はある程度勝ち進まなければ当たることはできない。
しかし、順位戦に関しては、今の俺は一番下のC級2組。
三段リーグを二位以内で抜けてプロになった棋士が最初に所属するクラスで、組み合わせという運にも左右されるが、プロなりたての新人でも十分俺と当たる可能性がある棋戦だ。
細かいことを言うと、同門……つまり師匠が同じ者同士は順位戦の最終局に組まれないという制限はあるが、別に最終局じゃなくても当たればそれでいいので、そこは問題ない。

……あれ、でも順位戦って。

「あの、姉弟子。俺、今期の順位戦は一応今のところ全勝できてるんで、このまま順調にいけば姉弟子がプロになる前に昇級するかと……」

「ダメ。負けろ」

「ええっ!?」

「それか竜王失冠でもいいわよ。タイトルホルダーじゃなくなれば当たりやすくはなるし」

「ちょ、ちょっと待ってくださいって、それは流石に……」

「冗談よ、ばか」

姉弟子は俺をからかってご満悦ならしく、小さく笑みを浮かべながら。

「八一が私を置いてどんどん先に行っちゃうのはいつもの事だし、もういいわよ。でも、私はずっと追い続ける。八一がどこまで行こうと、絶対に諦めない。覚悟しなさい」

「……はい。待ってます」

プロの世界で勝っていくのは簡単なことじゃない。

それ以前に、まず三段リーグを抜けてプロになる事だって並大抵のことではない。

本人だってそれはよく分かっていることだし、一度三段昇段を逃した時は、思い詰めて俺をホテルに連れ込むなんてとんでもない行動をとったくらいだ。

でも、今の姉弟子の目を見て、この人はきっと俺のところまで来てくれる、そう思うことができた。それだけ、力のこもった、勝負師の目をしていた。

それなら、俺はただ待つだけだ。

この竜王という椅子に座ったまま、堂々と、ボスキャラみたいに。

最近、目標というものを見失ってきていた俺にとって、これは新たなモチベーションとなるもので自分の中でも燃え上がるものがあり、自然とテンションも高くなる。

「それじゃ、付き合うのはプロとして戦ってからということで、これからも今まで通り将棋仲間としてよろしくお願いします！　あ、いや、今まで通りではダメですね、これからはもっともっとＶＳでも何でもやってお互い強くなっていきましょう!!」

「は？　将棋仲間？　何言ってんの？」

「えっ」

俺のテンションとは対照的に、姉弟子は氷点下の視線をぶつけてくる。

こ、こええ……！

「ど、どうしたんですか姉弟子……？　も、もしかして、公式戦で当たるまではお互い会わないとか言うつもりですか……？」

「違うわよ、せっかく練習相手に竜王を使える立場なのに、そんなもったいない事するわけないでしょ。そうじゃなくて、何で今まで通りの関係でいようだなんて寝ぼけたこと

言ってんのかを聞いてんのよ」
「えっ、でも、俺達が付き合うのは公式戦で当たってからなんですよね？　だから、それまでは今まで通りの関係でいよう、ってことじゃないんですか？」
「そんなわけないじゃない。八一あんた、自分の立場分かってないわね、ちょっとそこに正座しなさい」
「は、はい……」
　姉弟子の迫力に俺は抗うことなどできるはずもなく、ベッドから降りて床に正座する。
　そして姉弟子はベッドの上から俺を見下ろしながら説明を始める。
「確かに私達はまだ恋人同士ではないわ。でも、その約束はしてる。つまり、婚約みたいなものなのよ」
「こ、婚約……？　でもそれは結婚の」
「うるさい」
「はい、ごめんなさい」
　どうやら俺の意見は全て却下のようだ。
「婚約者がいるのだから他の女にデレデレするのは許されない、それは分かるわね？」
「わ、分かりますけど……その、あいを家から追い出せとか言いませんよね……？」

「流石にそこまで言わないわよ。でも、もし万が一あの小童と何かあったら……」
「だ、大丈夫ですって、あいは可愛い弟子ですけど、そういう対象では見てませんって！」
……あの、姉弟子？　なんですか、その目は……？」
「……」
この人、絶対俺のことを幼女に欲情する危険人物だとか思ってやがる……。
告白までしたのに、俺のロリコン疑惑が全く晴れてない。
姉弟子はまだ疑わしげな目を向けながら。
「とにかく、ロリだろうが巨乳だろうが、他の女にはデレデレしないこと。八一はちょっと目を離すとすぐ他の女とイチャついてるけど、これからは容赦しないわよ」
「い、今までのは容赦してたんですか……!?　というか、そういうので姉弟子が怒る時って大体が誤解ですし、別に俺はそんな女の子とイチャついてるわけじゃ……はい、ごめんなさい、これからは気をつけます」
姉弟子から冷たい殺気が漂ってきたので、すぐさま俺は背筋を伸ばし誓いを立てる。
怖すぎるだろこの人……とてもさっき俺のことが好きだと言ったとは思えない。
ただ、ここは俺としても言い分がある。
「……でも、姉弟子だって若手棋士の研究会に入るとか言ってたじゃないですか。いや、姉弟子を信じてないってわけじゃないですけど……」

「私が他の男とイチャついてるところを一度でも見たことあるの？　というか、私が八一以外の男と将棋以外の話なんてできると思う？　師匠は別として」

「そ、そんな自信満々に言われましても……あの、嫉妬しておいて何ですけど、流石に雑談くらいは出来るコミュ力はあった方がいいんじゃないかと……」

「……ふーん。コミュ力抜群でいろんな女と仲良くしてる竜王サマの言うことは違いますねぇ？　その、〝雑談くらいは出来るコミュ力〟があれば、ＪＳに膝枕してもらったり頬にキスしてもらったり、ＪＫから告られたり、ＪＤにお菓子を『あーん』って食べさせてもらったり出来るってわけね？」

「すいませんでしたぁっ!!」

まさかのカウンターが飛んできた！

姉弟子から溢れ出る凍えるほど冷たい殺気に、俺は震えて土下座することしかできない。

そのまましばらく土下座の体勢のまま、姉弟子からの審判を待つ。

すると。

「……立って」

「は、はい？」

「立って！」

「はいっ！」

訳も分からないまま立ち上がると、姉弟子はベッドに座ったまま顔を俯かせていた。

心なしか、首筋が赤くなっている気がする。

「……女に関しては、八一は前科が多すぎる。これからは控えるって言われても、簡単には信じられない」

「ええっ!?　お、俺が好きなのは姉弟子だけですって！　信じてくださいよ!!」

「ダメ、口だけなら何とでも言える。証拠を見せて」

「しょ、証拠と言われても何を……っ!?」

姉弟子の言う〝証拠〟という言葉に、聞き覚えがあった。

あれはハワイで行われた竜王戦第一局、一日目の夜。

二人で手を繋いで夜の街を歩いた帰り、姉弟子の部屋の前で、俺は同じことを言われた。

姉弟子は俯いていた顔を上げて俺のことをじっと見つめる。

その顔は首まで真っ赤になっていて、瞳は潤んで揺れている。

そして、姉弟子は顔を少し上げて、目を閉じた。

ごくっと思わず喉が鳴った。

姉弟子の顔から目が離せない。心臓が激しく鼓動し過ぎて口から飛び出しそうだ。

あまりの緊張に手汗がすごいことになっていて、いつもの癖でズボンを握りしめる。
姉弟子が、小さな声で言った。
「今度は……逃げるんじゃないわよ」
逃げるなんて選択肢、あるわけがなかった。
俺はベッドに近づいていく。
必死に足の震えを抑えて、一歩二歩と確実に。初めてのタイトル戦の対局場に向かう時もここまではならなかったと思う。
そっと、姉弟子の両肩に手を乗せる。
その瞬間、ビクッと姉弟子の体が跳ねて思わず手を離してしまいそうになるが、何とか思いとどまった。離したくなかった。
心臓の高鳴りは最高潮に達し、もはや痛いくらいだ。
姉弟子がこのくらいの距離にいるなんてことは、今まで何度もあったはずなのに、今この瞬間だけはまるで別空間かのように思えた。
俺は、最後通告のように、聞く。
「姉弟子……いいですか？」

「……うん」

姉弟子の了承の言葉に、俺は一度深く息を吸って気持ちを落ち着かそうとする。

これは一世一代の大勝負だ、おそらく一生記憶に残るものだ。何かやらかして暴発なんて許されないし、まずそんな事になったら姉弟子に殺される。

しかし、いよいよ後は姉弟子に顔を近付けるだけ、という段階になって俺の中である疑問が生まれていた。

……ここから、どんな感じで迫ればいいのだろう。

第一感では歩のように、ゆっくりでも少しずつ確実に寄って行こうかと思っていたのだが、いざやろうとしてみると妙に気恥ずかしい。

それなら、香車のようにさっと一直線に素早く寄って済ませてしまう方が、精神的には楽な気がしてくる。

ただ、それはそれで何だか軽いようにも思えて、姉弟子から不満を言われるかもしれない。

どちらも一長一短。

とはいえ、いつまでもこうして決めかねているわけにはいかない。持ち時間がどれだけあるのかは分からないが、あまり時間を使いすぎるのは悪手に違いない。

少し悩んだ末に……結局、さっと素早く済ませてしまう方を選んだ。

もうこれ以上じっくり攻めるのは精神的に無理だった。その前に俺の心臓が破裂しそうだ。

俺は覚悟を決めると、目を閉じて、一直線に素早く姉弟子へと顔を近付ける！

二人の距離はすぐにゼロになり、お互いの唇が触れ合った……が。

ガツン!!　と、勢いあまってお互いの歯がぶつかった。

「いてっ!!」

「つっ……」

やらかした。

その瞬間、口元の痛みなんかすぐに吹っ飛び、恐怖で全身から冷や汗が噴き出る。

こ、殺される!!

俺は即座に床に土下座した。

「すすすすいません!!　お、俺、その、テンパってて……ど、どうか命だけは!!」

「……」

姉弟子が恐ろしすぎて顔を上げることができない。

というか、顔を上げた瞬間に蹴りが飛んでくる気がする。
俺はしばらくそのままビクビクと姉弟子の反応を待っていたが。
「……いいわよ、別に。そこまで怒ってないから」
「……えっ？」
意外な言葉に、恐る恐る頭を上げてみる。
姉弟子は口元を押さえて不満気なジト目を向けてきてはいたが、今すぐ蹴りを入れてきたり将棋盤で頭をかち割ろうとしてくる気配はない。
姉弟子は小さく溜息をつくと。
「将棋しか能のない八一のことだし、最初から上手くできるなんて期待してないわよ。それに童貞だし」
「ぐっ……あ、姉弟子だって、俺にキスしようとして頭突きしたことあるくせに……」
「何か言った？」
「何でもないです」
今度は暴力の予兆を感じ取ったので、即座に取り繕う。俺の大局観も捨てたもんじゃない。
姉弟子はしばらく俺のことをジト目で見ていたが、やがて俯くと。

「……下手なのは仕方ないけど、いつまでも下手なままっていうのはダメ」
「え……あー、ま、まぁ……そうですよね」
俺の心臓が再び鼓動を早める。
姉弟子は、囁くような小さな声で続ける。
「……何度もすれば、流石に八一でも上手くなると思う」
「そ、そうですね……将棋と同じですね……」
「うん……将棋と同じ……」
そう言って、姉弟子は再び目を閉じて少し上を向いた。
俺の方も流石に先程の失敗から学んで、今度はゆっくりと顔を近づけて唇を重ねた。
一度目は感じる余裕もなかった柔らかい感触が唇から伝わってきて、触れ合っている部分が熱く、その熱が体全体に広がっていくような感覚があった。
それから数秒程で、俺達は離れた。
……お互い、まともに相手の顔が見られない。
「そ、その……これでいいですか……？」
「……５０点」
「うっ……ま、まだダメなんですか？　今のは結構良かったと思ったんですが……」
「だめ。やり直し……」

それから姉弟子に言われて何度かやり直したが、結局満点には届かず、これからも定期的に練習することになった。

俺が何度やり直しても上達しないのに姉弟子は妙に機嫌が良くて、俺もこのままずっと満点が取れないままというのも悪くないなと思った。

こうして、俺と姉弟子の関係は、恋人とまではいかなくても、確かに一歩近付いた。

ずっと当たり前のように側にいて、当たり前のように将棋を指していて、そしていつからか少し離れた俺達だったけど、今は昔よりも進展しているのだから不思議なものだ。

対局中の棋士は孤独で、頼れるのは自分自身だけ。

でも、その自分自身を形作っているのは自分だけではない。沢山の人々と出会い、様々な想いに触れて、大小何かしらの力になっている。

俺が清滝一門に入らずに、師匠や姉弟子、桂香さんと出会わなかったら竜王にはなれなかったかもしれない。それどころか、プロにだってなれたかどうか分からない。

弟子を取らなかったら、俺はいつまでもスランプから抜け出せずに落ちぶれていったかもしれない。

皆がいてくれなかったら、俺は竜王戦であっさりと名人に四連敗して竜王を失っていただろう。

だからきっと、今夜一歩進んだ俺達の関係だって、必ず力になる。もちろん、将棋以外でも。

棋士として、そして人としてもまだまだ未熟な俺達だけど、この一歩は俺達にとって大きな一歩なんだと確信している。

大切な人の暖かさをすぐ近くに感じながら、俺はこれから二人が進んでいくまだ見ぬ先に思いを馳せていた。

感想戦

関西将棋会館三階の棋士室には、今日も駒音が響いている。
「……ちっ、参ったよ、オレの負けだ」
「ありがとうございましたっ!!」
ちょっとヤンキー風なお姉さんが苦々しく駒を投げると、向かいに座っていた可愛らしい小学生は嬉しそうに声を弾ませながら、勢い良く頭を下げた。
それを俺と一緒に黒髪ロングの京美人が眺めているというのが、今のこの部屋の状況だった。
ヤンキー風お姉さんは超攻撃的な棋風が持ち味の女流玉将『月夜見坂燎』。
小学生は俺の愛弟子で圧倒的な終盤力を持つ女流二級『雛鶴あい』。
京美人は強固な囲いで相手の攻めを受け潰す棋風の山城桜花『供御飯万智』。
お姉さん二人は、この世界にいる者なら知らない者などいないくらいの有名人だし、小学生のあいも、この年で女流棋士になった将来有望な竜王の弟子という事で既に相当名も売れている。

あいは頬を紅潮させて興奮した様子でこっちを振り向いて。
「師匠、勝ちました！　わたし、タイトルホルダーの方に勝ちましたよ！」
「うん、ちゃんと見てたよ。良い将棋だった」
「えへへー」
褒めながら頭を撫でてあげると、あいは顔をふにゃふにゃに緩ませて気持ち良さそうに目を細める。かわいい。
一方で、月夜見坂さんはイライラとした様子で。
「調子乗ってんじゃねえよ、何局も指した中の一局だけだろうが。これが女流玉将戦だったら余裕でオレが防衛してるっつの」
「へぇ、お燎はもうあいちゃんとのタイトル戦を想定したはるんやねぇ。えらい評価高いやないの」
「ばっ、ちげーよ！　今のは言葉の綾っつーか……」
「はは、でも月夜見坂さんみたいな実力者に教われるなんて、弟子にとって幸せなことです。な、あい？」
「あ、は、はいっ！　ご指導ありがとうございます！」
あいは以前までは俺とばかり指したがったが、最近では棋士室で色々な人と積極的に指そうと心がけている。いい傾向だ。

月夜見坂さんは照れくさそうに視線を逸らして頬をかきながら。
「んな改まって礼言われることでもねえよ。まぁ、その、なんだ……オレもマイナビでは大人げないことしちまったしな」
あいはマイナビ女子オープンの本戦一回戦で、月夜見坂さんに盤上でも盤外でもこっ酷くやられてしまった。
ただ、その時は月夜見坂さんも虫の居所が悪かっただけのようで、罪悪感もあったのか今では関西に来た時はいつもあいの相手をしてくれるようになった。まぁ、月夜見坂さんが悪い人じゃないっていうのは俺もよく知っている。
するとここで、供御飯さんがニタァと怪しげな笑みを浮かべて。
「あの頃は、大好きな竜王サンが名人サンにボコボコにされとって、メディアも完全に竜王サンを悪役扱いで、お燎も荒れに荒れとったどすなぁ」
「ぶっ!?　おい万智テメっ、何適当なこと言ってんだ!!　別にクズなんて関係ねえよ、オレはただ……」
「はいはいツンデレツンデレ」
「誰がツンデレだコラァ!!」
そんな感じに盛り上がってる二人を見て、あいはニッコリとこちらを向く。
笑顔なのに、迫力がすごい。

「師匠……またですか？」

なにこれこわい。

というか、何でこの流れで俺が責められてるの……。

とにかく、このまま放っておいたら収集がつかなくなりそうなので、フォローを入れることにする。

「大丈夫ですよ月夜見坂さん、ちゃんと分かってます。その好きっていうのは、〝九頭竜八一の将棋が〟っていうことですよね」

「そうだよ！　ったく、万智テメェ、妙な誤解されるような言い方してんじゃ……いや待て、ちげーよ!!　オレは別にお前の将棋だって好きでも何でもねえからな!!」

この人面倒くせえ……。

でも、俺が負けていたせいで、そこまで荒れてくれる人がいたというのは素直に嬉しかった。あの時は本当に日本中が敵に回ったような気分だったからなぁ。

「その、ありがとうございます。正直、あの竜王戦は精神的にもかなりキツくて、俺も月夜見坂さんのこと言えないくらい荒れてましたよ。あの状況でも戦えたのは、やっぱり皆のお陰でした。対局中に皆の顔や声が浮かんだりもしたんですよ」

「……けっ、何だそりゃ。別に嬉しくも何ともねえよ」

「なるほど、竜王サンはこなたのバニー姿でも思い出して覚醒した、っちゅうことどす

な。そないゆうことなら、こなたが竜王戦の賞金の半分くらいもろても」
「んなわけあるか!!　ちょっ、あい、違うって！　あの状況でそんなもん思い浮かべたりしないから!!」
……供御飯さんのバニー姿が凄く良かったのはよく覚えてるけども。
ただ、その言葉を口にすると弟子が大変なことになりそうなので、ちゃんと黙っておく。
あいは不満気にぷくーと頬を膨らませながら。
「でも、やっぱり師匠にとって一番力になったのは、あいのことを思い浮かべた時ですよねっ!?　だって、あいは師匠の一番弟子なんですからっ!!」
「あ、あぁ、もちろん！　なんたって、あの最後の審判の形に持っていく順が見えたのだって、あいとの会話を思い出したからだしな！　それ以外だって、俺はいつもあいに助けられてるし、本当に弟子に取って良かったと思ってるよ。ありがとう」
「えへへ……わたしも、師匠と一緒に暮らせて将棋を指せて幸せです！」
あいはすっかり機嫌を戻してくれて、満面の笑みを浮かべている。
その笑顔は眺めているだけで、自然とこっちの胸も暖かくなっていく……あぁ、幸せだなぁ……。
そんな俺達の様子を見ていた月夜見坂さんと供御飯さんは呆れた様子で。

「ったく、なんだよその腑抜けた面は。イチャつくのは家でやれ家で」
「お熱いどすなぁ。こないな堂々と見せつけたはるんやから、ロリコン言われても仕方おざりまへんよ」
「……はは、確かにそうかもしれませんね。まぁでも、その内お互い恋人とかできれば自然とそういう話もなくなっていくんじゃないですかね。ウチの弟子は二人共凄い美少女ですし、周りの男も放っておかないでしょう。ただ、その時は俺も父親面して『お前なんぞに可愛い弟子はやらん！』とか言っちゃいそうですけど」
俺は学習した。
小学生を二人も弟子にとって、周りからロリコンロリコン言われるのは仕方ない。俺だって、周りの立場だったら同じことを思うだろう。
それならもう堂々としていよう。
だって、実際俺にはやましい事なんて何もないんだから。
むしろ、ムキになって否定すると余計怪しく見えるかもしれない。
そう、これがオトナの対応というやつだ。
俺も今年は竜王を防衛して最高段位の九段にもなった。そろそろ新進気鋭の若手棋士から、風格あるタイトルホルダーへと心構えを変えていく頃だろう。
それに、もう俺には姉弟子という心に決めた人がいる。

まだ恋人というわけではないが、お互い両想いだと知っていて、将来付き合う約束だってしている。

だから、そういう変な噂をたてられても慌てふためく必要なんてどこにもないんだ。

というか、妙な誤解を生むような反応を見せたりしたら、姉弟子に殺される。これからは容赦しないとか恐ろしいこと言ってたからなあの人……。

いつもと違う俺の反応を見て、月夜見坂さんは鼻で笑いながら。

「はっ、何いっちょ前に達観してますって空気出してんだよ。オレから見りゃお前なんかまだガキだガキ。せめて１８になって一緒に酒飲めるくらいになってから大人ぶりやがれ」

「い、いや、飲酒は２０歳からでしょ……というか、俺と月夜見坂さんってそんなに年変わらないじゃないですか」

「ちっちっ、オレとクズじゃ、なんつーの？　オーラってもんがちげーんだよ」

「……老けてるってことですか？」

「よし、そこ動くなよ。オトナになる前にここで頓死させてやる」

「じょ、冗談です冗談!!　月夜見坂さんみたいな若くて美人なお姉さんに向かって、本気でそんな事言うわけないじゃないですかー！」

「けっ、調子いいこと言いやがって。おい、万智もなんか言ってやれよ。クズが大人ぶる

のなんざ百年早いって……万智？」
供御飯さんに話を振った月夜見坂さんだったが、そっちを見て首を傾げる。
あれ、そういえばさっきから俺と月夜見坂さんしか話してなかったな。
あいや供御飯さんが静かなのは珍しいと思い、俺も二人の方を見てみると。

「「……」」

二人共、無言で探るような目付きでじーっと俺の方を見ていた。
な、なんだ……？
「えっと、あい？　供御飯さん？　お、俺の顔に何かついてる？」
「……師匠、最近ちょっと変わりましたよね」
「えっ？」
「せやな。なんやろ……余裕？　みたいなもんを感じますわ」
……な、なんか、よく分からないけど嫌な予感がする。
対局中でも、ぱっと見では嫌な変化はないように思えても、本能的に何かありそうな感じがする局面が出てくる時があるが、それに近い。
一方であいと供御飯さんは、二人で何か意味深なアイコンタクトをとっている。

それを見て、俺の中の不安は増々膨れ上がっていく。
そして、あいはにっこりと微笑みながら。
「少し前から供御飯先生とも話していたんですけど……師匠、最近何かありました？」
「な、何か？　何かって言われてもな……」
「たぶん、何か〝ええ事〟どす。心当たりありますやろ？」
「い、いい事……？　うーん、そうだなぁ……」
やばい……これはやばい！
最近あった良い事といえば、浮かんでくるのは一つしかないんだが、まさか勘付かれてるのか!?　あいと供御飯さんは前もって話し合ってたみたいだけど、もしかして詰みまで研究済みなのか!?
い、いや、落ち着け。
ここは一手間違えれば頓死する局面だ。焦っても何もいいことはない、落ち着いて、適切な受けを探すんだ。
そうやってダラダラと冷や汗を流しながら、対局中に匹敵する程集中して言葉を選んでいると、月夜見坂さんが面白くなさそうに。
「最近クズにあった良い事って、そりゃ対局のことだろ。竜王防衛してからずっと連勝

で、順位戦も昇級候補の筆頭ともなれば調子にも乗るわな」
「そ、そうそう！　良い事といえばもちろんそれですよ!!　いやー、俺も一応タイトルホルダーとして、いつまでもC2にいるわけにもいきませんし、今年は上がりたいですからね！」
　月夜見坂さん、ナイス！
　これで上手く切り抜けられたら姉御って呼ばせてもらおう！
　しかし、あいは瞬きもせずに瞳に怪しい光を灯らせて、じっと俺を見たままだ……こ、こわい。
「……師匠、本当のことを言ってください」
「ほ、本当だって！　この時期の棋士にとって一番重要なのは順位戦の昇級降級だし、やっぱり俺も」
「ズボン、ゴシゴシしてますよ？」
「ほあぁっ!?」
　俺はビクッと全身を震わせながら、慌ててズボンから両手を離す……が、遅すぎた！
　俺には、何か隠し事があると両手でズボンをゴシゴシする癖がある。
　以前にも、あいにその癖を見抜かれて窮地に追い込まれたことがあったのだが、それから何も成長してない……いや、でも癖って意識してどうにかできるものじゃないだろ

……。

　あいの追撃は続く。

「実は、この前お部屋をお掃除している時に、あるものを見つけたんです」

「あ、あるものって……？」

「銀色の髪の毛です。ベッドの上にありました」

　心臓が飛び出るかと思うほどに跳ねた。

　お、おかしい……絶対におかしい。

　確かにあの日は、結局俺と姉弟子の二人でベッドで寝たけど（あくまで寝ただけ）、その痕跡は念入りに消したし、もちろん髪の毛だって残していないはずだ。何度も確認した。

　でも、現にあいは見つけてしまった。

　あれだけ確認したのに見落としたってのか……！

「……ま、待ってくれ。話を聞いてほしい。それには深い理由があって、その」

「すみません、師匠。あいは嘘をつきました。ベッドには何もありませんでしたよ」

「……え？」

「でも今、師匠は『それには深い理由があって』と言いましたよね？　つまり、あいがいない間に、銀色の髪の毛がベッドに残っていてもおかしくない事があったんですよね？　ベッドがやけに綺麗だったのも、師匠が念入りに後始末をしたからなんですよね？」

あ、これ、ひょっとしなくても……詰んだ？

あいの将棋と同じくらいに凄まじい寄せで頭が真っ白になりかけていると、思考の端ではぼんやりと供御飯さんや月夜見坂さんの声が聞こえてくる。

「この前の竜王サンの順位戦で、銀子ちゃんが記録係してたっちゅうのはもう掴んでおざります。そんで順位戦で夜遅うなる日は、あいちゃんをお師匠サンとこに預けておざるんやろ。つまりその日の帰りに銀子ちゃんを家に連れ込めば一晩二人きり……ということどすなぁ」

「けっ、なんだそういう事かよ。童貞卒業したから大人ぶってみるとか、これだから盛りのついたガキは単純っつーか、バカっつーか」

「ま、待って待って、話を聞いてくださいってば!!」

このまま黙っていては勝手に話は進んでいくだけで、最悪の結末は避けられない！

俺はほとんど思考停止に追い込まれている頭を無理矢理動かして、何とか少しでもマシな落とし所を探る。

これはもう、姉弟子を泊めたという事実は誤魔化せない。

だから、そこに関しては自分の悪手を認め、これ以上被害が拡大しないように方針の転換を試みることにした。将棋ではそういったことを〝謝る〟といったりする。

「分かりました、白状します。確かにこの前の順位戦のあと、俺の部屋に姉弟子を泊めました。でも、それだけです！　姉弟子は記録係で疲れてすぐ寝ちゃいましたし、やましい事なんて何もしていません!!」

「嘘です」

「嘘どす」

「嘘だろ」

「ほ、本当ですってば、信じてくださいよ！」

三人共明らかに疑いの目を向けてきているが、ここはこう凌ぐしかない。

それに、まるっきり嘘というわけでもない。

少なくとも、月夜見坂さんが言うような一線を越えるようなことはしなかったのだから。

「大体、俺と姉弟子は師匠の内弟子として何年も一つ屋根の下で暮らしてたんですし、ちょっと俺の部屋に泊まるくらいそんな大した話でもないですって！」

「そんなことないです！　鈍感師匠はともかく、空先生は絶対下心あります!!　それに、最近は師匠だって空先生を見る目が変わってきてるじゃないですかー!!　あいは師匠

の一番弟子ですから、分かりますよ!!」
「せやなぁ、記者として竜王サンを追ってるこなたから見ても、最近の竜王サンと銀子ちゃんは何かあるとしか思えんわぁ。二人の噂は随分前からやけど、桜ノ宮でデートっちゅうのはもう完全に黒どす」
「……師匠？　わたし、その話初めて聞いたんですけど、またあいに黙ってデートしたんですか？　天ちゃんの時といい、原宿の時といい、もう師匠を縛って部屋に閉じ込めるしかないのかなぁ……」
あいは可愛らしく首を傾げているけど、言ってることが恐ろしすぎる！
このままでは大事な弟子がとんでもない道へと進んでしまいそうなので、慌てて弁解する。
「だから原宿の時も桜ノ宮の時も、研究会だったんだって！　ほら、原宿には釈迦堂さんと歩夢がいるし……」
「はっ、おいおいクズ、原宿は百歩譲って信じてやるけど、桜ノ宮で研究会ってのは苦し過ぎんだろ。将棋を指す前に別のモンを」
「言わせねえよ!!　下品過ぎるだろあんた、シューマイ先生かよ!!　違うんですよ、前にも言いましたけど、元々は京橋で生石さんと研究会してて、それで」
「……師匠、桜ノ宮ってどんな所なんですか？　どうしてそんなに慌ててるんですか？

確か京橋の隣っていうのは知ってるんですけど……」
「知らなくていい！　小学生にはまだ早い!!」
しかし、すかさず供御飯さんがニヤニヤと。
「あいちゃんだってもう十歳なんやし、このくらい教えたってええやろ。桜ノ宮っちゅうのはな」
「わーわー!!　ちょっと、勝手にウチの弟子に変なこと教えないでくださいよ!!」
「なんでダメなんですか師匠！　子供扱いしないでください！　というか、変なことする所なんですか桜ノ宮って!?」
「そりゃそうだろ。ラブホ街なんだし」
「……」
「あああああああ!!!!　何さらっと暴露してんだあんたあああああ!!!!」
もうやだこのダメなお姉さん二人！
恐ろしくてあいの方を見ることができない。
俺としては今すぐにでもこの部屋から逃げ出したいところだが、結局俺もあいも帰る場所は同じなので、その場しのぎにしかならない。
……待てよ？
そもそも、あいはラブホと言われて何のことだか分かるのだろうか。

少なくとも俺は、十歳の時にその単語を聞いても意味なんて全然分からなかったはずだ。

よし、それなら。

「……あいちゃんや。ラブホというのはね、仲の良い人達で気軽に入れるホテルで、お値段もお手頃な」

「知ってますよ。男の人と女の人がえっちな事するホテルですよね？」

「……そ、そういう事するカップルもいるみたいだけど、必ずしもそうじゃなくて、安いから女の子が友達同士で泊まったりも」

「でも、本来はカップルがえっちな事する場所ですよね？」

「……はい」

「そういうホテルが沢山あるのが桜ノ宮なんですね？　そこで師匠と空先生がデートしてたんですね？　そのままホテルに入って、えっちな事したんですね？」

「し、してない！　何もせずにただ寝ただけだから!!　本当だぞ!?」

「そうですか、ラブホには入ったんですね。空先生と」

「あっ……」

あいの目からは一切の光が消え失せていて、その目を真っ直ぐ向けられた俺は震えが止まらない……！

そして、そんな洒落にならない状況を、お姉さん二人は楽しんでいる様子で。
「まぁまぁ、竜王サン。そろそろ楽になってええんやで？　というか、竜王と女王が一緒にラブホ入ったっちゅう時点で、記者的には特大スクープやし、早速記事にしてもええくらいなんやけど」
「ちょっ、待った待った待った!!　あんたが書くのは観戦記でしょ、いつからゴシップ記者になった!!」
「いいから白状しろっつってんだろ。いいじゃねえか、銀子とそういう関係だってんなら、とりあえずロリコン疑惑は払拭できるじゃん。それにお前、神鍋先生や山刀伐先生、あと椚創多ともやけに仲良いから、そっちの疑惑も生まれ始めてるんだぜ？」
「はぁぁぁぁ!?　な、なんですかそれ、誰がそんな噂流してるんですか!?　なんか俺が老若男女関係なく手を出すヤバイ奴みたいになってるじゃないですか!!」
「えっ、し、ししょー……ＪＳでも巨乳のお姉さんでも、可愛い子なら誰でも手を出すとは思ってましたけど、まさか男の人まで……？」
「ちーがーいーまーすー!!　あと、そんなナンパ野郎だと思われてたの俺!?」
もはや三人は俺の言うことなど少しも聞かない。
これはいよいよ収集がつかなくなってきたと本気で焦り始めた、その時。
ガチャっと、ドアが開く音が部屋に響いた。

それは俺にとって光明に思えた。
こうして棋士室でギャーギャー騒ぎまくっている俺達だが、流石に誰か他の棋士なんかが部屋に来たら気を使って自重する。
つまり、強制的にこの話題を終わらせることができる！
俺は感謝を込めて、今部屋に入ってきた救世主の方を見る……が。

「……なによ、その目は。私は棋士室に来ちゃいけないわけ？」

そこにいたのは救世主ではなく、俺に止めを刺しに来た死神だった。
いつものセーラー服に身を包んだ銀髪の少女は、不満そうに俺の方を見ている。
姉弟子のご入室だった。
タイミングが悪いにも程がある……!!
ここにきて当事者が揃い、もう何か一言で頓死するような絶望的な状況に、俺は頭が真っ白になって呆然とする。
その隙を、供御飯さんが見逃さなかった。
「いいところに来やはったなぁ。実は今、竜王サンが銀子ちゃんとキスまでいったっちゅう話で盛り上がってたところどす」

「なっ……!?」
「ちょっ、何言ってんですかあんた！　俺はそんなこと一言もいでえっ!?」
言葉の途中で、姉弟子の強烈なローキックが膝に入り、俺は床に転がされる。
姉弟子は真っ赤な顔で、ゲシゲシと何度も追撃の蹴りを入れながら。
「このバカ！　バカ八一!!」
「いててっ!!　ちょ、ちょっと待ってください、話を聞いてくださいって！　俺はまだ」
「なに早速バラしてるのよ！　どうせ得意気に自慢してたんでしょ!!　まさか行く先々で話してるんじゃないでしょうね!?」
「あ、姉弟子ストップストップ!!　罠ですって!!」
「……は?」
慌てて姉弟子の言葉を止めようとするが、遅すぎた。
俺達のやり取りを聞いていた供御飯さんと月夜見坂さんは、二人してニヤアと嫌な笑みを浮かべ。
「ほうほう、やっぱりキスまでは行ったんやな。まぁ竜王サンと銀子ちゃんのことやから、一気に最後までっちゅうことはおざらんと予想しとったけど、その反応を見るにどうやら当たりどすな」

「んだよ、キスまでかよ、つまんねーの。クズも男だったらそこはガッといけよな、情けねえ」

お、終わった……。

そんな二人の様子を見て姉弟子もだんだんと状況を理解してきたのだろう、俺を蹴るのをやめて、恐る恐る尋ねてくる。

「……や、八一、もしかしてこれって」

「その、実は今、俺と姉弟子の間に何かあったんじゃないかって疑われてたんです……それで、俺の部屋に姉弟子が泊まったってところまではバレちゃって、それでも何もなかったって言い張ってたんですけど……その……」

「要するにこなたがカマかけたっちゅうことどす。竜王サンを問いただしても、どうせ何もなかったの一点張りやと思ったんでなぁ。上手くいって良かったどす」

「はっはっはっ、良い機転だぜ万智。将棋ではいつも銀子に散々いいようにやられてるからな、たまにはこういうのも悪くねえな！」

「……」

姉弟子は耳まで赤くして俯いて黙ってしまった。

い、いや、そこで黙らないでほしいんだけど……どうすんだよこれ……。

そして当然、この二人はここで攻めを緩めてくれる程甘くもなく。

「で、で？　お姉さんにもっと詳しく聞かせてみ？　キスっつっても、色々あんだろ。ベロは入れたのかよベロは」
「ななな、何言ってんすか、入れるわけないでしょ！　俺も姉弟子も初めてだったんですから、いきなりそんな……おいそこ、供御飯さん!!　何パソコン取り出してる!!　なぜメガネをかける!!」
「あ、ちょっと記者モードになっているだけなので、お気になさらず。それより九頭竜先生、キスは初めてだったとのことですが、何も問題はありませんでしたか？　私の予想では、歯がぶつかるといった定番の失敗をやっているんじゃないかなと」
「っ……そ、それは」
「なるほど、その失敗もしっかり経験した、と。他にもお聞きしたいのですが、鈍感で優柔不断な九頭竜先生がアプローチをかけたというのは考えにくいので、やはり空先生の方から何かしらのアクションを起こしてキスまで至ったのでしょうか？」
「そりゃそうだろ、ヘタレのクズが自分からキスなんてできるわけねえって。どうせ銀子がグイグイ行ってやっとそこまで進んだんだぜ。ったく、これだから草食系のモヤシ野郎はよー、男なら自分から行けっての」
「うっ……い、いや、それは俺も情けないとは……あの、鵠さん？　何をそんなに熱心にキーボード叩いてるんですか？　い、一応聞いときますけど、これ記事にしたりは」

「お気になさらず」

「気にするよ!!　おいちょっとマジでやめてくださいよ!?　そんな事したら洒落にならないことに……あの、姉弟子も黙ってないで何か言ってくださいって!!」

俺と姉弟子は互いの想いを確認してキスをしたが、まだ恋人となったわけではない。

いずれ姉弟子が四段になって、俺と公式戦で対局した暁には正式に恋人になって世間にも公表することになるのだろうが、まだ早い。というか、俺と姉弟子もまだ心の準備ってものができてない。

だから、その時までは表面上は以前までと変わらずいようと二人で決めていたのに、もう既にプラン崩壊の危機だ。じっくり指したかったのに、急戦を仕掛けられて焦る感覚と似ている。

とはいえ、この二人……特に供御飯さん相手に俺一人では捌ききれるわけもなく、この場で唯一の味方と言える姉弟子の助けを借りたいところなのだが、先程から顔を俯かせて黙り込んだままだ。

「やばいですって姉弟子!!　鵠さんのことですから、このままだと本当に俺と姉弟子の記事を」

「……る」

「はい？」

「帰る!!」

バタン！　と。

姉弟子は真っ赤な顔のまま、部屋から出て行ってしまった。

あまりにも唐突だったので、少しの間、姉弟子が出て行ったドアをポカンと見ていることしかできない。

しかし、次第に理解してくる。

この、絶望的な状況を。

う、嘘だろあの人、突然来て場をかき乱した挙句にさっさと帰りやがった……俺だけ置いて帰りやがった……！

もうダメだ、こんなのはどうにもならない。

好奇心旺盛な二人のお姉さん方からの凄まじい圧力を感じる。これから途切れることのない質問攻めを始める気満々だ！

即座にそこまで読んだ俺は、ここである一手を放った。

「よし、じゃあ俺も、今日は家でソフトでも使って研究するとしますか！　それじゃ、お

先に失礼します！」

そう、逃げの一手だ。

玉の早逃げ八手の得とも言うし、これは確実に好手のはず！

案の定二人が引き留めようと何かギャーギャー騒ぎ始めたが、俺は全く聞こえない振りをして颯爽と部屋を出る――――はずだった。

俺は部屋のドアの前で、立ち止まることになった。

何かを言われたからというわけではない。もっと直接的な……というか物理的要因によるものだ。

具体的に言えば、小さな手が、ぎゅっと俺の服の裾を握っていた。

ダラダラと、全身から冷や汗が噴き出るのを感じる。

その小さな手には、そこまで強い力は加わっていない。やろうと思えば簡単に振りほどけるだろう。

しかし、それを許さない、凄まじい圧力を背中に感じる。

そうだ、この場には、月夜見坂さんや供御飯さん以上にとんでもない存在がいた。

まるで獲物を狙う肉食獣のように、今までその気配を殺して機会を窺っていたが、ここにきて俺を逃がすまいと動いてきた。

その圧力に、俺は指一本動かすことができなくなり、当然振り返ることだってできない。

そんな俺に、背後から……低くて……異様に平坦な……声が……。

「師匠……きちんと全部説明してください……ね？」